



## 認め合い、支え合うこと

校長 土屋 智樹

はっきりと覚えていないのですが、確か私が小学6年生の頃、「学校に行きたくない」と思ったことがありました。特にこれといった理由を今は思い出すことが難しいのですが、恐らく友達関係の悩みからだったと思います。特定の子やグループから、嫌がらせを受けたり、いじめられたりしたからというわけではなかったのですが、自分の親には、そのことを言えず、苦しかったことを覚えています。幸いにも、私はそれを乗り越えて学校に通い続けることができました。しかし、私があの時、いじめを受けていたならば、果たしてその後学校に通うことができたでしょうか。

いじめを受けて心が傷つけば、その状況からどうやって逃れようか考えます。「いじめをしてくる相手、グループから離れて一人で過ごす」「学校を休む」など、子どもたちなりにいろいろと考えることでしょう。私も友達関係のことで自分の親に言えなかったように、いじめられていることを相談できない子どもたちもいると思います。昨今のいじめの報道では、相談できない子どもたちの中には、とても悲しいことですが、自殺という手段を選んでしまったということも聞きます。人の命はかけがえのなく尊いものです。その人の心を大きく傷つけ、人としての尊厳を奪ってしまういじめは、どんな理由があっても絶対にしてはならないのです。

しかし、近年のいじめの形態として、暴力による身体への直接攻撃のように肉体的な苦痛を与えるものや、仲間外れ・無視・相手が嫌がることをしたりさせたりするなどの心理的ダメージを与えるものの他、最近では、インターネットの掲示板やサイトへの個人を攻撃する書き込みを行うようなネットいじめも存在し、問題が複雑化してきて、解決がより難しくなっているケースもあります。では、私たちは、どうしたらいじめをなくすことができるのでしょうか。

まずは、いじめは絶対にしてはならないということ子どもたちに訴え続けていくことが必要です。5月29日のお話朝会で、「わたしのせいじゃない —せきにんについて—」という絵本をもとに、いじめはどんな理由があっても絶対にしてはいけないことだと子どもたちと一緒に考えてきました。このように、子どもたちに繰り返し教えていくことが大切だと考えます。

また、相手の立場になってその人の気持ちを考えることも大切です。最近問題になっているネット上の誹謗中傷は、相手がどう受け取るのか考えず、感情任せに発したものです。このように、深く考えずに発する言動が、時には人を傷つけてしまうことを私たちはもっと自覚する必要があると思います。

そして、私が考える最も大切なことは、一人ひとりが違うことを認めること、居場所があることだと思います。子どもたちは、これから先、ますます多様性に溢れた社会に生きていきます。一方で分断社会も今大きく問題になっています。私たちの進むべき道は、分断社会ではなく、共生社会を築くことです。今思えば、小学6年生の頃、学校に行きたくなかった自分が、学校に通い続けることができたのは、クラスに自分の居場所があったからだったと思います。一人ひとりの違いを認め、支え合って生きていけることのできる学校、社会になったらこんなに素敵なお話はないでしょう。

さて、さいたま市では、6月をいじめ撲滅強化月間と定めています。本校でもいじめ撲滅に向けての様々な取組を行っていきます。校長として、先生と子どもたちが対話を重ねながら、いじめのない学級を創っていくことを見守っていきたいと思います。